

## 15 世紀アルプス地域の魔術的慣習と悪魔学

田 島 篤 史

### はじめに<sup>1</sup>

古来、魔女・魔術という現象は人間の営みのうちに広くみられるが、ヨーロッパ＝キリスト教世界においては、裁判という形態を通じてこの現象を最もよく確認できる。古代・中世を通じてみられる魔女・魔術裁判は、15 世紀に一つの画期をなすと、以後、1560 年代に増加しはじめ、1590 年から 1630 年にかけて各地でピークを迎え、その後 1680 年代までに緩やかに減少していった。こうした魔女裁判を通じて多くの罪なき人々が処刑されたのであるが、その犠牲者の半数以上は神聖ローマ帝国において生じたのである<sup>2</sup>。

本特集のテーマは、「帝国」および「魔女」という 2 つのキーワードをもとにヨーロッパを読み解くというものである。一見して関係性の希薄な両者を通じてみえてくるヨーロッパ像とはいかなるものか、まずは当時ヨーロッパにおいて存在した「帝国」、すなわち神聖ローマ帝国について、以下を確認しておきたい。

神聖ローマ帝国は、形式上は 962 年にオットー 1 世が教皇ヨハネス 12 世によって戴冠されたことに始まる。以後、皇帝を頂点とする独立君主らのゆるやかな連合を維持し、1806 年にナポレオン 1 世によって解体されるまで、長きに渡りヨーロッパ中心部の広大な領域を含んで栄えた。1356 年の金印勅書により皇帝選挙の手続きが確認されるも、1452 年以降、1806 年の帝国解体までハプスブルク家が皇帝位を独占し、実質的には世襲的性格が認められた。このヨーロッパ随一の名門家系であるハプスブルク家には、自家世襲領および神聖ローマ帝国における政策上、極めて重要な領邦や都市がいくつか存在した。

1533 年以降ハプスブルク家の首都として、政治・経済・文化といった様々な面においてヨーロッパの中心の一つであったウィーンのほかに、当家最重要地の一つとして、アルプス地域に位置するティロール伯領が挙げられよう。ハプスブルク家が神聖ローマ帝国の事実上の世襲を始めた 15 世紀において、すなわちハプスブルク家繁栄の基盤が固められる

時代において、当家の拠点として政策上重要とされた地である。ティロールにおけるハプスブルク家の統治は 1363 年に始まるが、この地はスイスからアルザスに及ぶ同家の西部所領と東部オーストリア領邦を結合する地域として重要な意味を持っていた。とりわけ皇帝マクシミリアン 1 世は帝国からの自立化を強めていたスイス盟約者団への警戒からも、隣接するこのティロールの軍事力を含めた重要性を認識しており、インスブルックに宮廷を営み、またしばしば滞在した。そのためマクシミリアンは 1490 年以降、ティロールの軍事・裁判・政府組織に様々な改革を導入したのである<sup>3</sup>。

この地において、ティロール伯と緊密な関係を築いていたのがブリクセン司教およびトレント司教である。両司教は近世にも帝国諸侯の地位を維持し、南ティロール北東部のブリクセン司教領と同南西部のトレント司教領は帝国諸侯領としての自立性を守った。しかし両司教ともにティロール伯の保護支配に服し、伯には軍役と納税を果たして領邦議会に代表を派遣するなど、実質的には領邦ティロールへの従属的結合を強めていた<sup>4</sup>。聖界領域からみると、ティロール伯領はブリクセン・トレント・クルの 3 司教区からなり、宮廷都市インスブルックはブリクセン司教区に属していたことから<sup>5</sup>、また司教座都市ブリクセン（現イタリアのブレッサノーネ）とインスブルックとは、わずか 65km ばかりの隔たりしかなかったという地理的条件を考慮しても、ティロール伯とブリクセン司教との関係は、他の 2 司教とのそれよりも深かったことが窺われる。

以上のような「帝国」における重要地の一つ、アルプスのティロール伯領における「魔女」を分析するのであるが、実際の魔女裁判を検討する前に、魔女裁判が行われた機関についても確認しておく必要があるだろう。その際、まずもって指摘されねばならないのは、魔女裁判の多くは世俗の法廷で行われた、という事実である。E. M. カーンによれば、中・近世を通じてヨーロッパ全体でおよそ 7 万 5000 件の魔女・魔術に関する裁判が世俗の法廷であり、そのうち 3 万 5000 人から 5 万人が魔女として処刑されたという<sup>6</sup>。こうした世俗の裁判所での膨大な裁判件数に比べて、教会裁判所では魔女はほとんど問題とされなかった。教皇法廷を頂点に、以下、大司教法廷、司教法廷といったヒエラルヒー構造を持つ教会裁判所は、教会組織や規律に関する様々な問題を扱うが、教義や典礼に関する問題は扱えず、原則として流血裁判権は有していなかった<sup>7</sup>。

このヒエラルヒーに含まれない異端審問所では、世俗の法廷のように数は多くないにせ

よ、魔女・魔術案件が扱われることがあり、中には非常に熱心に魔女を取り締まろうとする異端審問官もいた。つまり、異端審問官が自らの職権において魔女を異端者として取り締まっていたのである。スペインおよびポルトガルは例外として、基本的に異端審問所はローマ教皇に属していたため、彼ら異端審問官たちは、教皇の権威を後ろ盾として魔女根絶に向けて活動していたことになる。本稿では、そのような教皇直属の異端審問官が扱う魔女・魔術案件を、世俗の法廷における大多数の魔女裁判と区別すべく、「魔女異端審問」と呼ぶこととする。

本稿が扱うのは、1485年にブリクセン司教区において行われた魔女異端審問であるが、本件は、悪魔学書『魔女への鉄槌』（以下『鉄槌』）の作者として悪名高いヘンリクス・インスティトーリスが主導した異端審問として有名で、従来は「インスブルックの魔女裁判」として当該分野では広く知られてきた。これは1890年に歴史家ハルトマン・アマンがブリクセン司教区文書館に保管してあった一連の記録を発見・編纂し、「1485年インスブルックの魔女裁判」と題して世に送り出したためである<sup>8</sup>。本稿では従来通りの名称を用いずに「ブリクセン司教区の魔女異端審問」とするが、その理由は上記の如く世俗法廷での魔女裁判と区別するためであり、また事件の詳細は後述するが、異端審問官らは魔女問題を刑事事件、すなわち世俗の問題としては扱わず、信仰に関わる問題と認識していたためでもある。加えて、本件は都市インスブルックにおける案件にもかかわらず、その責任者はティロール伯ではなく、ブリクセン司教であること、さらに本稿で扱う一連の史料群が、インスブルック市文書館やティロール州立文書館ではなく、ブリクセン司教区文書館に所蔵されていることから、事件当事者らおよび史料保管に携わった後世の人々が、本件を聖界領域であるブリクセン司教区での出来事と解していたことは明らかである。

これまで多くの歴史家たちが、アマンによって編纂された当該史料群を基に本件を分析してきたが、ほとんどの場合、『鉄槌』の作者インスティトーリスが主導したために取りあげており、それを初期魔女裁判の事例として扱っている<sup>9</sup>。『鉄槌』は、ヨーロッパで魔女狩りが猖獗を極めるかなり以前の1486年に初版が世に出たが、すでに害悪魔術、悪霊との性交、悪魔との契約、空中飛行、魔女集会といった魔女のステレオタイプについて体系的に論じており、そのような危険な存在である魔女の根絶を訴えている。また出版部数の多さや、ローマ教皇・ドイツ王（後の神聖ローマ皇帝）・ケルン大学神学部教授らからの支

持、さらには後世の悪魔学者らによる数多くの引用のため、本書の魔女狩り史上における重要性は幾度となく指摘されてきた。それゆえ本書の出版が魔女迫害を激化させたとまで言われてきたのである。こうした評価からして、本件とインスティトリスとの関連に着目するという視点は至極まっとうであると言えよう。しかし上述の通り、本件は「魔女異端審問」であって、もし魔女迫害の歴史において本件の意義を考察するのであれば、魔女裁判の初期事例として扱うよりも、異端審問所における魔女・魔術案件の流れの中に位置づけるべきではなかろうか。ただし本稿においてその作業を推し進めることは、上述の特集テーマから逸脱することになってしまう。

では特集テーマに沿うように当該史料群をいかに分析すべきか。19 世紀以来続く実証的魔女研究において、研究者の関心は長らく迫害行為そのものに向けられていたのであり、その迫害の対象に焦点が当てられることは極めてめずらしかった。20 世紀も 70 年代になって、ようやく一つの素晴らしい研究がこの状況を打開したことは周知の通りであるが<sup>10</sup>、多くの魔女研究者が人類学者から示唆を得ている現状において、異端審問記録の活用の仕方に関する C. ギンズブルグの主張は傾聴に値しよう。彼は異端審問官と人類学者とのアナロジーを指摘し、そのアナロジーの基盤はテキスト的な性質のもの、すなわち両者ともに「対話的なテキスト」を前にしていることに見てとる。フィールドワークを行う人類学者と違い、歴史家は過去の社会を対象としているため自らテキストを生産することはできないが、異端審問官の活動こそが人類学者のフィールドワークにあたり、そこで作成される審問記録がフィールドワークのノートに相当するといっているのである。総じて被告たちの答えは、異端審問官たちの問いを復唱する以外の何事も行っていないのであるが、それでもなおいくつかの例外的なケースにおいては正真正銘の対話に出会うことがあり、異端審問官たちの声とは区別され、相違した、それどころか対立する声が聞こえてくることがあるという<sup>11</sup>。ギンズブルグが出会った審問記録はまさにその典型であり、彼は異端審問官と被告との対話の中から、16～17 世紀フリウーリ地方における被迫害者らの農耕儀礼や土着信仰、さらにはそれらが悪魔崇拜へと変容していく様を見事に描き出したのである。

幸いにも、本稿で扱う審問記録も、単なる復唱を書き留めた類のものではない。また残存状況が極めて良好であることから、この豊富な史料のうちに紡がれた詳細な証言内容や審問でのやり取りからは、生々しいまでの人々の日常が垣間見えるのであり、我々の試み、

すなわち「帝国」と「魔女」を通じてヨーロッパを読み解くという試みにも十分に応じてくれるだろう。そこにこれまでの魔女研究史上の視点、すなわち本件をインスティトーリスとの関連で分析するという視点を加えることで、悪魔学者という当時の極めて特殊な知識人の思想のみならず、それに触れた様々な階層の人々とのギャップまでもが明らかになるのである。

## 1 ブリクセン司教区の魔女異端審問—1485 年 7 月から 9 月—

1485 年 7 月、異端審問官ヘンリクス・インスティトーリスの手には、一つの文書が握られていた。教皇インノケンティウス 8 世より賜った大勅書「スンミス・デシデランテス・アッフЕКティブス」である。この中には高地ドイツの諸地域およびマインツ、ケルン、トリーア、ザルツブルク、ブレーメンの大司教管区、都市、領邦、村、司教区における魔女・魔男に対する異端審問の全権を、インスティトーリスに委ねる旨が記されていた。また勅書は、地位や身分に関係なくすべての者に対して平等に訴えかけており、その求めに応じぬ者には、かなり威圧的な文言で威嚇してさえいた<sup>12</sup>。

幾名かの男たちを引き連れたインスティトーリスは、ブリクセンにて司教ゲオルク・ゴルザーに勅書を提示し、インスブルックで異端審問を行う許可を得た<sup>13</sup>。同じ月の 23 日には、ゴルザーは司教区内の聖職者たちに勅書を通知し、インスティトーリスの異端審問活動への協力を呼びかけている。ゴルザーは、協力者には 40 日間の贖宥を、非協力者には勅書に記された罰を与えると通知したが、発見された魔女に対して、場合によっては刑罰を科さないことを確認している<sup>14</sup>。許可と協力を得た異端審問官は、インスブルックへと急ぎ、8 月 1 日には活動を開始した。

インスティトーリスは審問活動に先立ち、仲間や同僚たちのために、自ら魔女異端審問の導入方法について書き記している。当該文書はもはや完全なかたちでは現存しないが、その指示内容は概ね次のようなものであった。まず魔女の見分け方であるが、彼女らは完全なる信仰否認を行うのであり、それは聖体拝領の際に聖餅を舌の上ではなく下に置いたり、告解において重大な罪を黙っていたり、聖なる事物でもって様々な迷信的で瀆神的な

悪業を為すのだという。また、魔女たちはあらゆる者たちへ悪しき影響を及ぼし、人間も動物も、とにかく有益な存在である者をいたわることがない。インスティトーリスは、魔女の存在を否定することは明らかな異端であるとし、そのことを聖書、教皇あるいは法学者らのおびたしい数の著作を引用して証明しようとする。魔女たちの行う犯罪とは主に以下のようなものである。すなわち、雹を降らせ、人間の理性を狂気へと混乱させ、抑えられないほどの憎悪や愛情を引き起こし、人間や動物の多産を妨げ、死をもたらす。そして最後にこれらの主張すべてが『司教法令集』に矛盾しないことを証明するのである<sup>15</sup>。また勅書にも次のような者たちとして魔女・魔男が記されている。すなわち、信仰からの逸脱者、悪霊と交わる者、様々な魔術や悪しき迷信を為す者、占い師、違反者、犯罪者、出産妨害者、動植物に危害を加える者、夫婦の営みを妨害する者、受洗後に瀆神的な言葉で信仰を否認する者である。このような者たちが魔女として当地の聖職者たちにも認識されたのであった<sup>16</sup>。

インスティトーリスは、これらの事柄を教区司祭たちに述べ伝え、民衆への周知を求め、その疑いのある者たちを密告するよう促した。その際、何人も恐怖が原因で密告を自制せぬよう、告発者の匿名性を保つべしとされた<sup>17</sup>。こうした働きかけの結果、住民たちから多くの情報が寄せられ、8 月末までに「疑わしい者 *verdächtig*」は 50 名以上にのぼった。そのうち 40 名以上がインスブルックもしくはその近郊住まいであり、この者たちは 2 名を除いてすべて女性であった。

これら「疑わしい者」への容疑を確定するために、8 月 11、13、15、16、17、18、19、21、23、25、29 日および 9 月 1、2、9、10、14 日に各 1 回、9 月 4、5、6、8 日に各 2 回、9 月 3 日に 3 回、8 月 9 日に 5 回、計 32 回の証人尋問が行われた。これらの証言には、証言者らの日常に根差した魔術的慣習が明確に見てとれるのであり、以下ではそうした証言のうち、魔術行為の動機が明らかなものを時系列に沿ってすべて取りあげ、種々雑多な民衆の魔術的慣習を再構成するとともに、日常生活における魔術の機能的側面について検討を加える。

尋問はクリステル・ヴェーバーという名の男の証言から始まる。

8 月 9 日。ヘッティンゲンのクロイベリンという名の女性が、自分の息子が彼女の意

志に反してある女性を娶ろうとしたため、その息子を殺したそうだと。クロイベリン自身が言っていたのだが、もし彼女が3回の日曜日を断食するのなら、息子はその年を生き延びることはできないだろうというのである。そして実際そのようなことが起こった。またクロイベリンはある貧しい男に魔術をかけて、片方の足にたいへんな患いを持たせた<sup>18</sup>。

ここでは、母親が自ら断食することが魔術行為の条件となっており、これによって対象者（＝息子）の寿命が極端に短くなると考えられている。そして実際、母親の魔術行為の直後に息子が死んだため、息子の死と魔術行為とが因果関係で結ばれている。また母親が息子に魔術をかけたのは、親子間でそれぞれが望む結婚相手が異なっていたからであり、つまり母親からすれば、息子が自分の言うとおりに結婚しようとしないので、魔術をかけて殺してしまったという構図である。結婚は財産の相続あるいは結婚持参金といった家同士の問題にも発展するため、母親としてはより良い条件を望むのは当然のことであり、結婚相手に関して親子間でしばしば意見の食い違いが生じることは仕方のないことであった。

また後半部分では、原因不明の足の病気を説明するために、魔術が持ち出されていることも指摘できる。古来ヨーロッパでは、ヒポクラテス（前460年頃～370年頃）と彼の学派が提唱した体液病理説が医学の根幹にあり、それをガレノス（後131～201年）が四体液のバランスに基づいて人間の気質類型を体系化したのであるが、中世以降近代医学が確立するまで、この「ヒポクラテス＝ガレノス」の体液病理説・気質説が、医学と医学的人間観を支配した<sup>19</sup>。しかしこの証言者は、こうした医学的伝統とは無縁の、つまり教養のない人物であり、彼のような人々が原因不明の病を説明する際、魔術の介在を想定することで、目の前の事象に対して彼らなりの合理性・整合性を担保しようとしているのである。すなわちこの証言は、学術的伝統とは異なった、民間での病理の説明において魔術が機能していたことを示す事例と言えらるだろう。

次の証言者は領邦君主ジークムントの理髪師ジークムント・ザックリンである。

8月9日。シュヴィンゲル・メントリンが領邦君主の理髪師であるジークムント・ザックリンに魔術をかけた。大きな疑いがある。というのも彼らは敵対関係にあったか

らだ。ある日曜日の朝、そのシュヴィンゲル・メントリンは、今は聖ミヒヤエル教区にいるニーレンベルゲリンという名の女性を、ザックリンの家に遣いにやった。そして、ザックリンは家の中を密かにうろついているニーレンベルゲリンを見つけたので、彼女になぜうろついているのかを尋ねた。彼女は答えようとせず、その後、ザックリンは手足が麻痺してしまい、そのことで彼はメントリンに対して恨みに思っていた。またザックリンは、禁じられているのだが、二人の占い師に〔メントリンのことについて（亀甲括弧内筆者補足、以下同じ）〕尋ねた。悪魔は嘘をつくし、占い師もまた嘘をつきうるのだが、二人の占い師はザックリンにそのように〔メントリンがザックリンに魔術をかけたと〕言ったのである<sup>20</sup>。

ここでは、証言者と彼が訴えている者とのあいだで、元々人間関係に問題を抱えていたという前提が重要であろう。敵対者に遣いをやった直後に起こった突然の不幸（＝手足の麻痺）を、被害者は相手方の魔術によるものと解しているのである。また不幸の原因究明のために、占い師に協力を仰いでいることも注意すべきである。「禁じられているのだが」という文言は、明らかに記録作成に際して挿入された異端審問官側の見解であって、占い師という人々が日常的な紛争解決の手段として頼られていたことがわかる。同様に、「悪魔は嘘をつくし、占い師もまた嘘をつきうるのだが」という文言も記録作成者側の見解であることは明白であろう。つまりこの文言は、知人との紛争解決に占い師を頼りたいとする証言者と、それを取り締まりたいとする審問官側の占い師に対する正反対の評価が現れていると言えるだろう。ただしこの証言からは、この占い師という人々が、その行為によって対価を得るといった職業的な専門集団であったのかどうかまでは不明である。

続いては、リーンハルト・ツィンマーマンの娘クレーレとクリストフ＝マオラーの妻の証言である。

8月9日。老女フェンデンがリヒャルティンという名のある釜炊きの妻に以下のことを教えた。リヒャルティンが絞首台に上り、そこに吊るされている盗人から何かを取ってくるべし、と。彼女がそれで誰かに触れると、触れられた男は彼女のことを好きにならずにはいられないというのだ。リヒャルティンがそれについて習ったのは次の



ような理由があった。というのも、リヒャルティンには一人の娘がいて、ある男がその娘を妊娠させたのだが、その男が今では彼女に対してちっともよくしてくれないという<sup>21</sup>。

この証言にみられるのは、孕まされたにもかかわらず、相手の男に邪険に扱われた娘を思い、その男を娘に振り向かせようと魔術を習う母親の姿である。恋人同士のあいだで生じた私情のもつれに、女の母親が介入しているのだが、その解決を罪人の死体を用いた恋の魔術に求めている。また、この魔術は第三者に教わったものであることから、共同体内に魔術を指南する役割の人間が存在したことが窺える。それほど裕福でない家庭にとって、子供が一人生まれ、その子供の父親が面倒をみないということは死活問題である。加えて、前近代社会の医療技術では望まれない子供への対処は非常に限られており、彼女の母親が魔術にすがった背景には、そうした事情があったことは想像に難くない。つまりここでは、未婚者間での妊娠・出産に際して、女性側が男性に対して子供の認知、あるいは結婚を望んでいるのであり、目的達成の手段として魔術が用いられているのである。このように魔術には、法廷のような公的な場とは違った、非公式の解決手段としての役割も与えられていたと言えるだろう。しかし法廷闘争同様、この非公式な手段によっても当事者が望む結末へと達せられないことは多くあったのだが。

次の記述は、証言者のマルグレータ・テューリングリンが故エルザの実兄から聞いた話である。

8月11日。ボヘミア人女性のエルザは、自分の妹でシューファアの妻でもあるエルザに二度魔術をかけたそうだと。一度目にかけたときには、彼女の身体は麻痺し、もう一度かけると、彼女は死んだ。動機は次のようなものである。そのボヘミア人女性の夫が自分の家に妻の妹を住まわせていたのだが、妻が夫に妹を家から追い出して欲しいと頼んだとき、妻は、夫から自分よりも妹のことを愛しているのだと告げられた。それゆえ妹の身に苦しみが生じたのである<sup>22</sup>。

これは、夫に自分よりも妹のことを愛していると言われて、妹に魔術をかけて殺したと

されるボヘミア人女性の話であるが、ここでは容疑者の夫と妹との不倫を匂わす証言があり、不倫相手である妹に降りかかった突然の不幸が魔術と結びつけられることで、夫婦生活において被害者であるはずの妻が魔女の疑いを持たれている。また容疑者が「ボヘミア人女性」とわざわざ書き記されていることも、指摘されるべきであろう。ここでのボヘミア人とは、15 世紀後半という時代を考慮すると、おそらくフス派信徒を指し示す言葉であり、ブリクセン司教区においてボヘミア人（＝フス派）は宗教的マイノリティーであるのみならず、インスブルックへの移住者（＝よそ者）でもあるという二重の意味でのマイノリティーである。そして女性というのは当時の社会的周縁者の代表的存在であり、こうした人たちが魔女の疑いをもたれていたということを示す事例として挙げられよう。

次はマティス・フェントの妻ドロテア、ペーター・キルシュナーの妻カテリーナ、ドロテア・ブロートベッキン、ギュンテリンの証言である。

8 月 16 日。3 名の者たちによる断固とした宣誓のもと、ツーシュレッテリンは、普段からのよくない噂を訴えられた。その噂とは、彼女が書記イェルゲン・クーヒェンと結婚したアポローニアという名の若い女に魔術をかけたので、その女が死んだに違いないというものであった。またギュンテリンは居合わせていたので、ツーシュレッテリンがアポローニアに次のように言うのを聞いた。「いやはや、あんたは私の男を横取りしたね。この先あんたには決していいことが起こりませんように。」その言葉はアポローニアが受けた最後のものであり、ツーシュレッテリンが彼女に死を与えたのである<sup>23</sup>。

ここで訴えられているのは、恋人を横取りされたことで、恋敵の女性に呪いの言葉を吐き、殺したと噂されている女性である。恋愛関係のもつれの中で、腹立ちまぎれの捨て台詞を吐くことはめずらしいことではないが、その台詞と当事者の不幸とが時間的に連続して起こってしまったため、たちまち発話者の言葉は魔術と解され、若い女の死と捨て台詞とが因果関係で結びつけられたのである。また 4 名の証言者が同様の因果関係を証言しているという事実から、こうした状況下において呪いの言葉でもって人を殺せるという考え方自体は、当時としては極めて一般的であったと言えるだろう。

続いてはキュンツィルメツィガーの娘のもとで暮らしているエンリ・ジッピン、カスパル・シュミット、カスパル・ヨルダンの息子ジークムント・シュミットによる証言である。

8月16、18日。洗礼を受けたユダヤ人女性エネル・ロッテリンとハインツ・ザテルクネヒトの妻エンリとアポローニアという名の女（アポローニアは死んだが、先の二人はまだ生きている）は5年前のある晩に、我らが主の磔刑図を鞭打っていた。そしてさらに、それよりも冒瀆的な言葉を神に対して吐き捨てた。アポローニアは、この文書にあるようなことを彼女たちが言っているのを目撃した。同様に、カスパル・シュミットの妻バルベルもその家で起こった事件について知っている。彼女が言うには、エネルは磔刑図を鞭打っていたが、この洗礼を受けたユダヤ人の女は、聖母マリアについても悪口を言った。「マリアがイエスを産んだときに、彼女の陰部にあった痛みと同じように、あなたの息子〔＝イエス〕にも痛みがありますように。」<sup>24</sup>

ここでも改宗した元ユダヤ人女性という、典型的な社会的周縁者が容疑者として登場する。キリスト教社会において周縁的存在であり続け、時には他者として排除されてきたユダヤ人であるが、この証言から、たとえ改宗したとしても、完全にはキリスト教社会に受け入れられずにいたことは明らかであろう。そうした改宗ユダヤ人で、かつ女性という二重のマイノリティーである人物が、イエスの磔刑図、神、聖母に向かって冒瀆的行為を働いたとされるているのであるが、ここでは他の証言でみられるような別個に生じた事象間の因果関係を説明するために魔術が登場するわけではなく、なんの脈絡もない瀆神行為に関する証言であることから、これらの諸行為は実際に行われていたというよりは、儀礼殺人のようなユダヤ人を表象する言説として解されるべきではなかろうか。そしてそのようなユダヤ人言説が魔女異端審問の現場に現れるということは、まさにユダヤ人と魔女双方の言説が司法の場において融合していく過程が示されていると言えるだろう<sup>25</sup>。

次の証言はクリスタン・エンゲルスペルガー、マグダレーナ・ハルプフィンゲリン、ヴェルフィル・ファッサーのものである。

8月19日。老女レントリンが、はじめにクリスタン・エンゲルスペルガーに魔術をか

けようとし、その後、エンゲルスペルガーがレントリンに愛情を抱くようにと彼に薬を飲ませようとして訴えられた。レントリンは、エンゲルスペルガーが彼女よりも他の女性のことを愛していると考えていたようである。そこでレントリンは彼に二度「魔術を」試みた。一度目は 3 匹のトゲウオを使ったのだが、それらを彼女の陰部の中に挿れて殺し、他の材料と混ぜ合わせて粉にしてエンゲルスペルガーに与えた。レントリンがその男と交わるためにである。二度目は、多くの小さな足の骨が入った粉を使ったのだが、レントリンはその粉を一通の手紙の中に入れて、今はメランに住んでいるシュタイニルという名の人物に渡し、エンゲルスペルガーとヴォルフガングの妻である下女のマグダレーナのあいだに投げつけようとした。シュタイニルがレントリンに、何が起こるのかと尋ねたので、彼女は次のように話した。「それは彼らがよくわかっているだろう。」しかしシュタイニルはそれ「粉を投げつけること」をしようとはせず、マグダレーナとクリスタン、そして夫のヴェルフィル・ファッサーにもこのことを打ち明けた<sup>26</sup>。

ここでみられるのは動物を用いた性愛魔術である。一度目の魔術では術者が対象者との性交を目的としており、魚を陰部に挿れるという行為は、小魚を男性器に見立てて自らの身体とを媒体に魔術行為を試みていることから、ある種の類感魔術を思わせる。この魚粉を用いた性愛魔術はアルプスに特有というわけではなく、ヨーロッパ他地域でも見られるものである<sup>27</sup>。二度目の魔術でも動物の一部から作られた粉が使われているため、はじめの魔術との関連を想起させられるが、対象者が男のみならず、その妻も含まれていることから、おそらくは夫婦間の営みを妨害することを目的とした魔術だと考えられる。また老女という社会的周縁者が、訴えられていることも注意を要する。大迫害期においては非常に多くの老女が魔女として裁かれたのであるが、すでに 1485 年の時点で性欲旺盛な老女が魔女として認識されつつあったことを示す事例であると言えよう<sup>28</sup>。

続いての証言者はヴァルブルクとその娘マルガレータ・シュトフィルベッキン、若いキニスティン、そしてイェルク・バイザーの妻エネルである。以下の 8 月 29 日の尋問では内容の異なる複数の証言がラテン語で記されており、どの証言が誰のものであるのかは判然としない。以下では、魔術行為が動機とともに述べられている証言のみを取りあげる。

インスブルックのアンブリュッケに住むミヒャエル・ツィンマーマンの妻に多くの疑いがある。というのも、他の女たちが拘留されていたとき、彼女は逃亡していたが、〔拘留されていた女たちが〕解放されると戻ってきたからである。彼女には自らの意志で突然天候を変えることができるという疑いがあり、それゆえ次のように噂されている。近所の女たちがいつも通り「ホルヴェッティン horwettin」をしていたとき、すなわち亜麻を引いて、亜麻糸を巻きつけて束をつくるために男手が必要だったときに、男たちが誰一人いなかったのもので、その告発されている女が次のように言った。「私は多くの男たちに会えると思うよ。」そして天候を変えると多くの男が集まり、彼らが束をつくった<sup>29</sup>。

ここではある女性に天候魔術を用いたという噂があり、そのことについて告発されているのであるが、容疑者自身が天候を操れることを仄めかしていたとされており、その目的が糸紡ぎに際しての男手の確保だという。この魔術行為の目的は非常に奇異である。というのも通常魔女裁判において天候魔術が問題になるのは、個人への直接的な攻撃ということもあるが、多くは農作物への被害がともなう場合であり、飢饉をもたらす恐るべき魔術として語られる。つまり天候魔術は、農業被害を説明する言説として用いられることが一般的であるが、この証言では人を呼び寄せる手段として天候魔術が用いられており、それによって一人として危害の加えられた者はいない。もちろんティロール伯領が非農業地帯であったわけではなく、それどころか非常に多くの農民が存在した<sup>30</sup>。それゆえ天候魔術が現れる文脈が、他の多くの地域と比べて非常に奇妙に映るのである。

次はヨハン・ラインおよび彼の妻であるエラ・ヘルティンクが宣誓のもとで行った証言である。

9月3日。アンナという名のクンツ・ツィンマーマンの妻がハンス・ラインの妻に魔術をかけた。アンナはとても強力な魔術をかけたため、ラインの妻は3年目になる今でも首、背中、脇腹に絶えず刺すような痛みを抱えている。これをアンナがしたことは確実であり、それは次のような考えからであった。ハンス・ラインはアンナを娶ることになっていたが、彼はそうしようとはせず、現在の妻を娶った。そのためアンナ

はあるとき次のように話したのである。「言ったとおりでしょ！あんたはその女を娶るつもりなんだ、私じゃなしにね。思い知るだろう、その女とあんたには決して健康が訪れないことをね！」そしてその通りのことが起こった<sup>31</sup>。

ここでも上記8月16日の証言と類似の構図がみられる。すなわち、かつて恋仲であったが何らかの事情があってけっきょくは結ばれなかった男女がいて、男は別の女と結婚したが、結婚できなかった方の女が妻となった女に呪いの言葉を吐き、その直後に不幸が生じたため、彼女の発した言葉が魔術と解されたのである。

次の証言者はハインリヒ・シュナイダーの妻エリーザベトである。

9月3日。メスナーの妹のエルス・ハイリヒクロイツェンに対して。彼女が男に魔術をかける方法を人々に教えており、彼女自身もその魔術を使っているに違いない。エルスが男の代わりとなる一羽の黒い雌鶏を買ってきて、人間に食べさせるという密かな目的のために、生きたまま心臓を取り出したそう<sup>32</sup>。

ここでは女性が男性に魔術をかけるということから、この魔術が性愛魔術であろうことが推し量られるが、さらに上記8月9日の3つ目の証言と同様、共同体内にそうした魔術を人々に教える役割の人間が存在し、脈々と魔術が受け継がれてきたことが窺い知れる。また、上記8月9日の4つ目の証言や8月19日の証言にもみられるように、人間や魚の死体を用いた魔術も性愛魔術であったことから、ブリクセン司教区では恋愛や性に関する男女間の魔術には人間を含む何らかの動物を用いる、という魔術媒体に関する一つの傾向も指摘できよう。

次はクリスティン・イプフホーフェリンの証言である。

9月6日。トレンリン・レートフェルダーの妻に、牛たちから牛乳を抜き取った疑いがある。牛乳を取られたある人物が言うには、ちょうどその人物が来た時に、彼女が牛乳桶を牛たちの頭上に引っ掛け、悪魔の名においてその桶を叩こうとした。そしてその人物は涙が出てきて、吐き気を催した<sup>33</sup>。

ここで述べられている牛乳を盗む魔女は、一見たいした損害をもたらさないように思えるが、じつはそうではない。牛乳はそれ自体の消費に加えて、バターやチーズなど様々な乳製品の原材料となるのであって、当然これらも自家消費されたが、余剰物は市場販売により収入ともなりえたため、いざ自分の家の牛が乳を出さないとすれば、貧しい家ではそれ自体が死活問題であった。ここでの牛乳魔術は、悪魔の名において儀式めいた仕方で行われており、被害は牛乳のみならず、人体への危害もみられることから、一つの魔術行為から二種類の効果が生じているという点で非常に特徴的である。この牛乳魔術もアルプス地域に限らず、ヨーロッパではかなり広範にみられた類の魔術である<sup>34</sup>。

次は、髭を蓄えた眼科医のマグステル・ハンスとその妻カテリーナ（彼らは証言時にはすでにインスブルックから移住していた）およびドロテアによる証言であり、これらはラテン語で記されている。

9月14日。この証人は、文書にあるように、アンナ・ゴルトシュミーディンと敵対している。上述のカテリーナがかつて彼女の家において、ある行為に対して腹を立てたとき、上述のアンナ・ゴルトシュミーディンが次のように言った。「あんたたちを懲らしめてやる。さもないと神さまが私を殺してしまうでしょうよ。」そしてその後それが為された。つまり、彼女が小魚を釣っていて、かのカテリーナにすべて食べてよいと言ったので、カテリーナは彼女の夫とともに、それらの魚を全部食べようとしたまさにそのとき、二人は重い病気になってしまい、眠ることも食べることも、体を動かすことさえもできなくなった。

上述のアンナがカテリーナの夫に言ったことについて、ドロテアも同様に述べている。「髭面の悪者め。あんたたちを懲らしめてやる。さもないと神さまが私を殺してしまうでしょうよ。」そして上述の如く、そのように為された。しかしドロテアは、[ハンスが] そのとき病気であったことを誠実に述べているのではなく、このことを占いによって知ったのである<sup>35</sup>。

やはりここでも、もともと敵対関係にあった人たちの一方に生じた不幸と、呪いの言葉とが結びつけられて魔術と解されている。しかしここで魔術行為の動機として容疑者の口

から語られているのは神への畏怖であり、当事者間の敵対関係が直接影響したのかどうかは不明である。また魚を食べようとしたまさにそのときに病気になったため、魚自体が魔術の媒体と考えられていたのかも不明である。さらにこの証言には二種類の証言者、すなわち問題の当事者と単に居合わせただけの第三者とが存在し、両者の証言では発せられた呪いの言葉と病気との因果関係を想定するまでの過程が異なっていることが指摘できる。つまり当事者は病気になったことを直接呪いの言葉と結びつけて考えているが、第三者の方は占いを通して両者を結びつけるようになったのであり、このことから呪いの言葉とその直後の不幸とが必ずしも直線的に結びつけられたわけではなかったと言えるだろう。そしてこの占いについては、記録の中では誠実ではないとされており、ここに異端審問官側の当該行為に対する一貫した態度が示されているのである。

以上が8月9日から9月14日までのあいだで、魔術行為のみならず、その動機までもが明らかな証言であるが、これらの分析を通じていくつかの傾向および特徴を指摘できる。まず容疑者として挙げられていた者たちは、ボヘミア人・ユダヤ人・女性・老女といった社会的周縁者、あるいは告発される以前から悪い噂のあった者、さらには人間関係に問題を抱えていた者たちであった。こうした者たちの周囲で何らかの不幸が生じた際に、自分の敵対者からの超自然的な攻撃を想定したり、同じく報復したり、またもともと疎んじられていた者たちを排除しようと告発されたのである。こうした状況下で魔術は様々な役割を担っており、時には病理として、時には非公式の紛争解決手段として、また時には別個の事象を因果関係でつなぐ媒介として語られている。これら魔術を通じたやり取りは当事者間にとどまらず、占い師や魔術指導者といった第三者が介在している場合も多々見られた。用いられている魔術の多くはアルプスに特有というわけではなく、他地域でも広範に見られるものが多いが、天候魔術が人を呼び寄せるために使われていたり、牛乳魔術によって人体にも危害が及ぶなど、一部特殊なケースも認められた。しかしたいいていの証言は、家族や隣人・知人とのトラブルあるいは原因不明の病気について語っており、換言すれば、日々の不満を異端審問官たちに打ち明けていたに過ぎない。確かにインスティトリスをはじめとする部外者たちが、日頃からの不満を明確に形あるものにしたのはあるが、だがそれゆえにこの魔女異端審問を通じて、我々は当時のブリクセン司教区民の生々しいばかりの日常を目の当たりにしていると言えるのである。



しかしながら、インスティトーリスにとってはこの都市が、この司教区が魔女で溢れかえっているように感じられていた。そこで彼はティロール伯にしてオーストリア大公であるジークムントに2通の手紙をしたためた<sup>36</sup>。おそらくは50名を超す容疑者の扱いについて、すなわち逮捕・取り調べに関する司法的権限について記されていたと思われる。1通は大公へ、もう1通はブリクセン司教ゲオルク・ゴルザーに宛てられていた。これを受けてジークムントは、これら2通の手紙に加えて自ら司教への助言を求めてもう1通、計3通をゴルザーのもとへと送った<sup>37</sup>。9月21日、ゴルザーはこれに応えるべく、大公とインスティトーリスとに向けて、それぞれ書簡をしたためている<sup>38</sup>。ゴルザーは異端審問官へ必要な全権を委ねることを決意し、その旨を大公にも伝えたのである。また、大公に対しても異端審問官への協力を求め、教皇の権威を損なわぬことを懇願した。ただし、裁判の際には法規に則って正しく行われること<sup>39</sup>、さらには、やむを得ぬ理由がない限り、被告人に対し告発者の名前を知らせるべきであるとする、ボニファティウス8世の勅書の遵守を訴えたのである<sup>40</sup>。

## 2 ブリクセン司教区の魔女異端審問—1485年10月から11月—

10月に入り、7名ものインスブルック在住の女性が逮捕された。インスティトーリスは彼女らの容疑を確定すべく、10月4日から21日にかけておよそ30もの証人尋問を行った。インスティトーリスはほとんどすべての尋問を、ユトレヒト司教区から来た教皇の公証人ヨハン・カントナーとともに行ったが、それに加えてしばしば以下の面々も参加していた。ヴィルヘルム・ベーリングー、ハインリヒ・ホフマン、ヴォルフガング・フォン・バーゼル、カスパー・フォン・フライブルク、マギステル・ヨハン・フォン・レースバハ、フランチェスコ会修道士ヨハン・ローゼンバルト、パウル・カエル・シルマイスター、司教の代理人にしてアクサムの主任司祭であるジギスムント・ザオマー、そして大公の代理人である。逮捕された女の一人、ヘレナ・ショイベリンの裁判がインスティトーリスに意外な結果をもたらすことになる。以下、ヘレナに関連する動向に注目したい。

10月4日、インスティトーリスは自ら証言台に立ち、ヘレナに対して非難を浴びせた。

彼によれば、ヘレナはインスティトーリスの説教を軽視していた。彼が説教壇に上るとき、あるいは教会を出て行くとき、呪いの言葉を吐き捨てた。「あなたの白髪頭に災いが降りかかりますように。悪魔があなたのことを連れ去ってしまいますように」。インスティトーリスにはこのような発言が信じられなかった。それゆえ裁判の折り、彼女が牢屋から彼の前に引き連れられてきたときに、発言の真意を問うた。するとヘレナは「あなたは異端のこと以外は何も説教しないわ」と答えた。「どういうことだ？」と異端審問官が尋ねると、「だからあなたは魔女のことしか説教しないのよ」と返した<sup>41</sup>。

我々からすればこれら一連の出来事は、つまらぬ説教しか行わない聖職者と地域住民との単なる口喧嘩でしかないだろうが、しかしインスティトーリスには被告が魔女である確たる根拠と思われた。つまり異端審問官にとって、自らの聖なる職務を妨害するような女性性は魔女であるに違いないと感じられたため、一証人として自ら証言台に立ったのである。

証言はさらに続く。噂を耳にただけの者から、被害者から直接聞いた者までその情報源は様々だが、ヘレナのさらなる容疑は、騎士イェルク・シュピーースの殺害であった。具合の悪い騎士のもとへ足繁く通っていた彼女は、周囲の人々にはシュピーースの不調の原因と映っていた。証言者の一人は、ヘレナが毒を盛っていたことを仄めかしさえていた。あるイタリア人医師が、シュピーースに向かってヘレナを遠ざけることを提案した。さもなくば死を免れはしないと。医師が忠告したにもかかわらず、騎士はその助言に従わなかった<sup>42</sup>。

そして最後にもう一つ。ある女性が7年前から身体の調子が悪く、ヘレナの魔術によるものだという。その女性の結婚式でヘレナは呪いの言葉を吐いた。「あなたにはここでのようすばらしく、健康な日が多く訪れませぬように」。それ以来、彼女は身体や手足を患っている。彼女の夫が言うには、彼が独身のときヘレナと肉体関係を持っていたのだが、ヘレナとは結婚するには至らず、そのことを恨みに思って、自分の妻に魔術をかけたのではないかというのである<sup>43</sup>。

10月29日の朝、インスブルック市庁舎の大広間にてヘレナの裁判は始まった。そこには、法学の教授資格免許取得者にしてブリクセン教会総代理クリスタム・トゥルナー、神学および教会法博士にして法学の教授資格免許取得者であるアクサムの主任司祭ジギスムント・ザオマー（彼ら二人は、大公の要請に応じて司教の代理人として遣わされた、本件

の責任者であった)、神学・教会法博士にしてパッサウ司教座聖堂参事会員の教養教授パウル・ヴァン、ドミニコ会士のヴィルヘルム・ベーリンガー、ハインリヒ・ホフマン、ヴォルフガング・フォン・バーゼル、カスパル・フォン・フライブルク、教養教授ヨハン・フォン・レースバハ、二人の公証人ヨハン・カントナーとバルトロメウス・ハーゲン、そして異端審問官インスティトーリスが集まっていた<sup>44</sup>。

ヘレナは彼らの前に連れて来られると、ありのままを述べることを誓わされた。そして質問が始まる。インスティトーリスは、まず被告のこれまでの人生について尋ねた。ヘレナは、インスブルックで生まれ育ったこと、ゼバスティアン・ショイバーと結婚して8年が経つことを包み隠さず話した。ここまでの彼女の人生は正しく立派なものであった。しかしここで質問の内容が急変する。インスティトーリスは被告の処女性について、性的な秘密について尋ねだした。結婚前に男性と関係を持ってしまった女、結婚してからも夫以外の男のもとへ足繁く通う女、このような性的ふしだらさは、インスティトーリスには深刻な問題に映ったのであろう。しかし慌ててジギスムント・ザオマーが割って入り、これらの質問が本件とはなんら関係がないとして退け、威嚇しさえした<sup>45</sup>。この場合はインスティトーリスが譲歩し、続いて証人尋問で得た証言について尋ね始めた。しかし、このとき再び司教の総代理人クリスタン・トゥルナーの怒りを買ってしまった。異端審問官の質問は軽率かつ一貫性を欠くものとして、異議を申し立てられたのだ。結局、裁判は11時まで中断することとなり、インスティトーリスはそれまでのあいだに被告への質問を今一度整理するよう命じられたのであった<sup>46</sup>。

再開の時刻が訪れた。再び集まった一同に加えて、新たに一人の男が席に着いていた。ヨハン・メルヴァイス・フォン・ヴェンディンゲン、教会法学の教授資格免許取得者にして医学博士でもあるこの男が、ヘレナを含む7名の被告の弁護人として参列した。彼にその権限を正式に与えるべく、直ちに公文書が作成された。弁護人は7名の被告たちの調書に目を通すや否や、異端審問官を驚かせるような行動に出た。なんと彼は告訴の無効を主張し、さらにはインスティトーリスの逮捕までも要求したのである<sup>47</sup>。

メルヴァイスがこのように行動したのは、次のような根拠からであった<sup>48</sup>。第一に、異端審問官は証人尋問の際には、司教によって宣誓させられた公証人を用いるべきと勅書にも記されているにもかかわらず、それを行わなかった<sup>49</sup>。第二に、異端審問官は様々な罪

について質問しているが、それらは彼の管轄に属するものではなく、また勅書においてもそのことについては触れられていない。第三に、異端審問官は被告に対して、当該する証人の陳述に基づき、彼女たちの不名誉な事柄について尋問すべきであるが、彼はこのことに関する質問をまとめ上げることすらできないゆえ、未だに質問がなされていない。第四に、異端審問官は合法的な手続きを踏まずして女性たちを逮捕したのであり、それゆえ彼には、自らの越権行為についての責任が生じている。第五に、異端審問官はすべての尋問および記録文書を作成させるにあたり、公的な公証人、少なくとも司教が承認した公証人を呼ぶことなく行っていた<sup>50</sup>。

長い論争の幕開けであった。弁護人は本件においてインスティトーリスは不適格であるとみなし、彼の代理としてフライジング司教、あるいはその地の首席司祭と司教総代理が相応しいと推薦した。さらに公証人に対し自らの抗弁についての謄本を作成することを、そして司教の代理人たちには、異端審問官を拘留し、被告人たちを完全に釈放することを求めた。謄本については、翌日までに作成することが約束された。被告人の釈放については異端審問官の頑強な抵抗の結果、弁護人が一部譲歩し、彼女たちは「軽い拘束」を続けられたが、インスティトーリスの処遇については結論が出なかった<sup>51</sup>。権限ある裁判官としての立場を固持するインスティトーリスに対し、メルヴァイスは教皇法廷への上訴に取り掛かろうとしていた。この場には事態を収拾できる者などおらず、結論は次の月曜日、すなわち10月31日まで持ち越されることとなった<sup>52</sup>。

明くる週、一同は市庁舎ではなく、インスブルック市民コンラート・グンター邸にて再び相見えた。初日の面々に加え、ヨハン・ブランケンハインとウルリヒ・プーフラーの姿があった。

初めにメルヴァイスが、教皇法廷へ上訴する意向を改めて示した。インスティトーリスがそれに対して異議を申し立てると、賢明な弁護人は一旦譲歩したかに見せて、即座に次の手を打った。彼は異端審問官が被告人たちに対して取った行動は、厳正な調査の必要があり、その調査結果を自分に知らせてから、最終的に判決を下してほしいと申し出たのだ<sup>53</sup>。おそらくこれが決め手になったのだろう。クリスタン・トゥルナーより次のような判決が下された。

7名の被告の女性たちに関する本件は、法規範に則って行われてはおらず、それゆえ無効であると言わざるをえない。また、投獄されている女性たちは釈放されねばならない。しかしながら、つまずきがあり噂の立っている彼女たちは、公衆の面前で以下について誓約しなければならない。すなわち、いかなるときも、彼女たちは新たな審理のために、あるいは教会法に基づき清めを行うために出廷することを求められたならば、それに応じなければならない<sup>54</sup>。

インスティトーリスは自身の逮捕こそ免れたものの、この解任・逮捕要求はメルヴァイスの裁判上の戦略に過ぎなかっただろう。その他の弁護側の主張はすべて認められていることから、本件はインスティトーリスの完全敗訴と言ってもよい。インスティトーリスは、この判決によってこれまでの仕事は意味を失ってしまった。裁判はこれ以上行われず、今一度、司教ゴルザーの名の下に異端審問官に全権を委任する旨の文書が読み上げられた<sup>55</sup>。しかしこれはただ虚しさが増しただけであろう。なぜなら彼の3ヶ月以上にわたる活動が、つい今しがたすべて無駄になったばかりだったのだから。

2日後、7名の被告は彼女たちの保証人とともに宣誓したうえで釈放された<sup>56</sup>。インスティトーリスは諸費用の支払いを、被告人の一人に命じていたが、彼女に対する無罪判決を受けて、すべての費用の負担を大公ジークムントが気前よく申し出た。事件はこれにて一件落着いたのである。この判決の後も、納得のいかないインスティトーリスは、司教の再三にわたる退去勧告にもかかわらず、インスブルックに残り調査を継続しており、翌年の2月になってもまだ滞在していたことが確認される。しかしその甲斐も無く、再び法廷が開かれることはなかった。

### 3 『魔女への鉄槌』にみる夢魔信仰と性的問題

さて上述の如く、インスティトーリスは手続き上の不備を突かれて、裁判で敗れてしまった。そのきっかけとなったのは、ヘレナ・ショイベリンに対する性的な質問の数々であるが、なにゆえ彼はそのような質問を何度も行ったのであろうか。たしかにキリスト教に

において姦通は大罪であり、聖書でもそれを禁じている。しかしなぜ、魔術を用いて人を傷つけたり殺害したりした廉で逮捕された女性に対して、彼女の性生活について尋ねる必要があったのか、その理由は依然不明である。この問いの解を探るべく、本章ではインスティトーリスの主著『魔女への鉄槌』をひも解き、魔女と性的問題との関連について、彼がいかに考えていたのかを検討する。『鉄槌』は1486年12月にはすでに書物（＝商品）として完成していたため<sup>57</sup>、時期的にみて執筆は、ブリクセンでの活動と並行してか、あるいはその直後であったと思われる。本書の中にはブリクセンでの異端審問活動に関する記述も多々見られ、この地における敗訴がインスティトーリスをして『鉄槌』の執筆を促したとも言われている。つまり『鉄槌』で論じられている性的問題は、ヘレナの審問時におけるインスティトーリスの当該問題に関する見解と極めて近い、あるいはまさにそのものであると言っても差し支えないだろう。

『鉄槌』における魔女の性的問題は、悪霊との関係の中で論じられることが多い。魔女と性交を行う悪霊が頻繁に述べられているのだが、これらの悪霊はかなり体系的に論じられているため、まずはこれらの悪霊に対する信仰がいかなるものであるのかを見ていきたい。インスティトーリスは人間と性交する悪霊として二種類挙げ、女性と交わる悪霊を男夢魔 *incubus demon*、男性と交わる悪霊を女夢魔 *succubus demon* と呼ぶ。またこの悪霊たちの行動上の秩序については以下のように述べている。

悪霊どものあいだでは、ある上位の者によって創られた内的かつ外的な行動の秩序がある、と主張することは正統である。それゆえ、上位の悪霊どもが自然本性の気高さゆえにそこから除かれているところの汚れた行為が、非常に下位の悪霊どもによって為されるのである（1:4, 27D）<sup>58</sup>。

ここで述べられている行動秩序は、上位に位置する悪霊によって創られており、淫らな行為を行うのは、下位に位置する悪霊のみであって、上位の悪霊はその自然本性の気高さゆえに行うことはない。またインスティトーリスは、悪霊は霊であるが、人間にはたらしかけるときなどは「空気」の特質をもつ自らの身体を「土」の特質に近づけるように圧を加えて「土の特性に近似した凝縮気体」でできた肉体をとる（2:1:4, 106A-B）と述べてお

り、「悪霊どもはそのとられた肉体の中で、魔女どもと話し、見、聞き、食事し、そして生み出す」(2:1:4, 106C)としている。悪霊はこのとられた肉体でもって夜な夜な女性のもとへ出掛けていき、淫らな行為に耽るのである(2:1:4, 108A)。

これらの悪霊に影響を受ける人間は三種類いて、第一に、自らの意志で男夢魔に服従する女性、次に、自らの意志に反して男夢魔と女夢魔とに巻き込まれた人々、そして、まったく自らの意志に反して男夢魔に悩まされる処女である(2:2:1, 159A)。また、インスティトーリスは、「過去においては、女性たちの意志に反して悪霊どもが彼女たちを悩ませていた」が、魔女たちは「今はもはや嫌々ながらなどではなく、自らの快樂のためにこの最も嫌悪すべき事柄にあわれな隷属状態でもって服している」とする(2:1:4, 108B)。さらに「男に影響を与える女夢魔への〔男が取る〕行動は、まったくもって自発的ではない」として、男性が行う女夢魔との性交に対しては擁護の姿勢を取る(2:2:1, 159A)。この他にも作品を通じて女性蔑視の記述が多く目につくが、インスティトーリスによれば、男性よりも女性のほうが、迷信深い人が多いという。なぜなら女性は信じやすく、不安定な気質で霊に影響されやすく、口が軽い(1:6, 41D-42A)からであり、また女性は信仰心が少なく(1:6, 42C)、そして肉欲に支配されており(1:6, 45A)、そのため、すべての魔女は男夢魔との性交におよぶのであって(2:1:2, 96C)、このような汚れた行為を最上級の表現を用いて非難している(1:3, 26C; 1:4, 28B; 1:5, 33D; 2:1:4, 108B)。

自らの快樂のために淫らな行為におよぶ魔女に対して、悪霊は快樂のためではなく、人間を墮落させる目的で魔女と性交する(2:1:4, 109B)。悪霊が男夢魔や女夢魔になる目的は、「情欲の悪徳を通じて人間の自然本性を両方ともに、すなわち肉体と魂とをともに害し、そうすることで人間がすべての悪徳に傾くようにすること」である(1:3, 24B)。ただし、夢魔たちは聖地では汚れた行為を實踐できないとされており、これは聖地は天使が守護していることが理由として挙げられているが(2:1:4, 110C)、魔女との性交に関してはこうした場所等の細かな条件が設定されている。このように性交という行為に際しても、悪霊と魔女とではそれぞれまったく異なる目的を有しているが、インスティトーリスにとって魔女の性交を放置することは、人間社会を破滅に導くような重大事だと考えていたわけであり、それゆえこの危険極まりない行為を看過することなどできるはずもなかったと言えよう。

しばしばこれら夢魔と人間との性行為において、子供が生まれるか否かとの議論がなされてきたが、インスティトーリスも多くの紙幅を割いて当該問題に取り組んでいる。この議論からは彼の夢魔信仰が詳しく見てとれるため、以下に検討する。

人間がしばしば男夢魔と女夢魔とによって生み出されると主張することは、極めて正統であり、このような主張への反対意見は、聖人たちの言葉はもちろん、聖書の伝統にも反すると言われるべきである…… (1:3, 23B)。

このように、悪霊との性交によって子供が生まれるというのがインスティトーリスの主張である。しかし彼は、この生まれてきた子供は悪霊の子供ではないという。それは男夢魔の放出する精種 *semen* が問題であるためだ。男夢魔が魔女へと注入する精種は自らのものではなく、女夢魔として犯罪者の男性などから取ってきた精種であるため (2:1:4, 109B)、男夢魔と魔女との性交でできる子供は、最初に精種を放出した男性の子供とされる。「悪霊どもはあることのための精種を、他のことの誕生のために取ってくるように、男のためには女夢魔である悪霊が、女のためには男夢魔となる」のであり (1:3, 24D-25A)、物質を空間的に移動させる能力を有している悪霊は、このようにしてある者の精種を運んでいるに過ぎないという論理である。つまりインスティトーリスは魔女の妊娠・出産、悪霊の物質運搬・移動能力との関連で捉えており、この能力は空中飛行と同種の能力として語られている。

では、このような悪霊との性交はなにゆえ罪だとされるのか。それはこの性行為自体が悪霊との「明示的契約 *expressum pactum*」を意味しているからである<sup>59</sup>。明示的契約とは自らの意志のもと悪霊と結ぶ契約のことで、肉体的快楽を求めて男夢魔と交わる女性は、その行為により魔女となる。契約締結以後、魔女は悪霊から助力を得られるようになり、様々な超自然的な力でもって悪業を為すことができるのである。インスティトーリスによれば、洗礼を受けた後の「不信仰 *infidelitas*」を異端と呼び、悪霊と契約を結ぶ「魔女という異端 *heresis maleficarum*」は、ユダヤ人および異教徒を含めた三種類の不信仰の中で最も深刻であるという。なぜなら「人間は神から離れれば離れるほど、罪はより深刻になる。というのも、人間は不信仰を通じて神から最も遠ざけられるからであり、それゆえ



不信仰であるところの魔術は、他のあらゆる罪よりも重い」(1:14, 72C) からである。異端者への罰とは、破門 *excommunicatio*、免職 *depositio*、財産没収 *rerum ablatio*、肉体の死 *corporalis mors* が挙げられており、異端者であることが発覚した後に、その者が信仰へと戻ること、あるいは異端の見解を棄てることをすぐには望まない場合、その者が俗人であるならば、直ちに火あぶりにされるべきであり、他方、その者が聖職者であるならば、聖職剥奪の後、処刑のために世俗の法廷に送られる。しかし異端者が信仰へと戻るのであれば、一生涯投獄されるべしという (1:14, 74C-D)。つまりヘレナの場合は前者であったため、インスティトーリスは彼女の火刑を望んでいたことになる。

以上のような夢魔たちから身を守る方法についても論じられている。インスティトーリスは先達の異端審問官ヨハネス・ニーダーの『蟻塚』*Formicarius* を権威に以下のような5つの対処法を挙げている。第一に、告解の秘蹟を行う。第二に、十字を切るか聖母マリアへ呼びかける。第三に、悪魔祓いをする。第四に、場所の移動を行う。そして第五に、聖人による破門である (2:2:1, 160A)。またこの他にも、主への祈り、聖水散布を通して悪霊から身を守ることが可能とされており (2:2:1, 160B)、必ずしも人間が対処できない存在として悪霊を捉えているわけではない。だがそれゆえに、快楽を求めて悪霊との性交に耽る女性は、自らの意志でその行為を選択しているのであり、極めて卑劣な大罪であるという論理に帰結するのであろう。

以上が『鉄槌』における魔女と夢魔とに関する性的問題であるが、インスティトーリスはかなり複雑な論理でもって当該問題を捉えていたことが分かる。これらのことを前提として、法廷での質問が為されていたとすれば、コンテクストを共有しない者にとっては、あまりにも不可解な議論に感じられたとしてもなんら不思議ではない。実際、ジギスムント・ザオマーやクリスタン・トゥルナー、ヨハン・メルヴァイスらはインスティトーリスの主張をまったく理解しえず、彼らの見解はインスティトーリスと真っ向から対立した。つまりインスティトーリスの取った戦略は、法廷闘争という舞台において完全なる誤りであったと言えるだろう。こうした慎重さを欠いた戦略は、後ろ盾となっていた教皇の権威を過信していたのかもしれない。しかしティロール伯およびブリクセン司教は、15世紀に増してきた教皇庁の介入を快く感じてはおらず、教皇直属の異端審問官に対して最大限の警戒を示していたことは間違いない<sup>60</sup>。そうした歴史的コンテクストまでもを考慮すれば、

インスティトーリスの完全敗訴は驚くには値しないだろう。しかし結果的にその敗訴が、異端審問官を『鉄槌』の執筆へと向かわせることになったのであるが。

## おわりに

15 世紀における「帝国」の重要地インスブルック、聖界領域としてはブリクセン司教区、で行われた異端審問で、住民たちが口々に訴えていたのは、現代の我々の社会にもあるような、人間関係に発する諸問題、あるいは病気や搾乳量の減少など突然の不幸といった日々の不満であった。こうした日常における諸問題や説明のつかない不幸に彼らなりの合理性を与えていたのが魔術である。そのため彼らの日常には魔術的慣習が溢れかえり、時には紛争解決の手段として、時には助力を求めて等々、様々な状況下で用いられていた。共同体の中にはこれら魔術を教授する役割の人間もあり、民間の技術として連綿と受け継がれてきたのである。

これらの魔術的慣習は、極めてありふれた日々の不満や隣人たちとの緊張関係と密に接しており、心の奥底でくすぶっていた数々の小さな火種は、外から来た異端審問官たちの問いかけにより、炎となって一気に燃え広がった。この部外者たちは、彼らの伝統に対して新たな認識を提示し、異端審問という司法の場においてキリスト教の枠内へと押し込めようとした。審問官らのこの試みは、悪魔・悪霊からの攻撃によって脅かされる人間社会を救うことを意図していたのであるが、しかしそのあまりにも拙い審問術は、緻密な法廷戦略の前では手も足も出ず、また無学な民衆だけではなく学識者らですら、この救済の意図を汲みとれはしなかった。ここに悪魔学という知識体系の放つ異彩な光を見てとることができよう。

こうして「魔女」と名づけられたかつての伝統は、ここアルプスにおいては炎による救済を免れはしたが、この敗北が異端審問官をして『鉄槌』を誕生せしめ、悪魔学がさらなる発展を遂げる端緒となった。つまり「帝国」における敗北こそが、新たに「魔女」を生むきっかけを作り出したのである。

<sup>1</sup> 本稿は、2017 年 11 月 25 日に愛知大学人文社会学研究所主催ワークショップ（ワークショップテーマ：帝国と魔女で読み解くヨーロッパ）において「中・近世ティロール伯領における魔女裁判」と題して行った講演の原稿を加筆・修正したものである。

<sup>2</sup> Wolfgang Behringer, *Witches and Witch-hunts: A Globale History*, Cambridge, 2004, p.63-65, 137, 150 and 156.

<sup>3</sup> 服部良久『アルプスの農民紛争—中・近世の地域公共性と国家—』京都大学学術出版会、2009 年、40 頁。

<sup>4</sup> 同上、40—41 頁。1806 年の帝国解体に伴い、南ティロールはオーストリア領へ編入されるが、第一次世界大戦後にオーストリアからイタリアへと組み込まれた。現在でもドイツ語・イタリア語がともに通用する地域である。

<sup>5</sup> Josef Gelmi, *Geschichte der Kirche in Tirol: Nord-, Ost- und Südtirol*, Innsbruck / Wien / Bozen 2001.

<sup>6</sup> Edmund M. Kern, “Courts, Secular”, in: Richard M. Golden (ed.), *Encyclopedia of Witchcraft: The Western Tradition*, vol. 1, Santa Barbara, 2006, p. 228. 犠牲者の総数については研究者によっていくらかのばらつきがあるため、ここでは数値に幅を持たせたカーンに従ったが、例えば B. レヴァックは約 6 万人と推定し、W. モンターは 4 万人以下と述べている。一方で約 5 万人と見積もる W. ベーリンガーは、モンターが示す数値を楽観的過ぎるとしており、自らの提示する数値もさらなる調査によって 20%以内の増加の可能性を示唆している。Cf. Brian P. Levack, *The Witch-Hunt in Early Modern Europe*, London / New York, 1987, p. 21; William Monter, “Witch Trials in Continental Europe 1560-1660”, in: ed. by Bengt Ankarloo and Stuart Clark, *The Athlone History of Witchcraft and Magic in Europe: The Period of The Witch Trials*, vol. 4, Saffron Walden, 2002, p. 13; Behringer, *op. cit.*, p. 149 and 157.

<sup>7</sup> Edmund M. Kern, “Courts, Ecclesiastical”, in: Richard M. Golden (ed.), *Encyclopedia of Witchcraft: The Western Tradition*, vol. 1, Santa Barbara, 2006, p. 224.

<sup>8</sup> Hartmann Ammann, „Der Innsbrucker Hexenprozess von 1485“, *Zeitschrift des Ferdinandiums für Tirol und Vorarlberg*, Bd. 34, 1890, S. 1-87.

<sup>9</sup> この視点は史料編纂者であるアマンのうちにすでに見てとることができる。Vgl. *ibid.*, S. 3-4.

<sup>10</sup> Carlo Ginzburg, *I Benandanti: Stregoneria e culti agrari tra Cinquecento*, Einaudi, 1972 (竹山博英訳『ベナندانティ——一六——一七世紀の悪魔崇拝と農耕儀礼——』せりか書房、1986 年)。本書は改訂版の初版である。

<sup>11</sup> カルロ・ギンズブルグ（上村忠男訳）「人類学者としての異端審問官」『歴史を逆なでに読む』みすず書房、2003 年、130—147 頁（原典 1989 年）。

<sup>12</sup> 「……どのような地位の者であろうと、またどれだけ身分が高い者であろうと、罪ありと判断した者にはその罪に応じて処罰し、罰金を課し、投獄する許可を与える。……。」Henricus Institoris, O. P. and Jacobus Sprenger, O. P., ed. and trans. by Christopher S. Mackey, *Malleus Maleficarum. Vol. I: The Latin Text and Introduction; Vol. 2: The English Translation*, Cambridge 2006. Vol. 1, p. 201 および vol. 2, p. 21 からそれぞれ引用。

<sup>13</sup> 異端審問官は教皇直属であり、その任命・解任の権限をもつのは教皇だけであった。教皇アレクサンデル 4 世（在位 1254—61 年）が一連の勅書を発布して以来、形式的には、異端審問官は司教および教皇代理に対して独立的に活動しえたのだが、実際には異端審問官とその任地の司教との関係は極めて込み入っており、時代によっても異なっていた。J. フィルハウスによれば、13 世紀のあいだは、異端審問官の下す終身禁固刑と死刑の判決は司教の裁可を待たねばならず、14 世紀初頭からは、異端審問所の判決すべてに司教の承認が必要とされたという。異端審問の執行に必要な君主たちの協力を得るために司教たちの斡旋を必要

としたことによって、異端審問における司教の権限がある程度まで保証されていたのである。教皇直属の異端審問官の活動が最も盛んであったのは 13 世紀であり、1300 年以降は急速に縮小された。その理由として、フィルハウスは以下の 3 点を挙げている。すなわち、第一に異端審問所が司教の権限下に置かれるようになったこと、第二に異端審問を世俗の君主たちが代行するようになったこと、そして第三にアヴィニョン教皇庁および教会大分裂の時代に教皇の権威が失墜したことである（J. フィルハウス『異端審問』『新カトリック大辞典』第 1 巻、研究社、1996 年、478-79 頁および渡邊昌美『異端審問』講談社、1996 年、131 頁を参照）。ここでもインスティトリスがブリクセン司教に自身の審問活動についての許可をもらっていることから、15 世紀末においても異端審問における司教の影響力はなお健在であったことが分かる。

<sup>14</sup> Ammann, op. cit., S. 5. この決定に対してアマンは、ゴルザーが異端審問官らの活動を通常の説教者の職務に適用させたためと解釈している。

<sup>15</sup> Ibid., S. 5-7.

<sup>16</sup> Mackey (ed.), op. cit., vol. 1, p. 199; Vol. 2, p. 19.

<sup>17</sup> Ammann, op. cit., S. 7-8.

<sup>18</sup> Ibid., S. 9.

<sup>19</sup> 黒川正剛『魔女とメランコリー』新評論、2012 年、26-30 頁。

<sup>20</sup> Ammann, op. cit., S. 10

<sup>21</sup> Ibid.

<sup>22</sup> Ibid., S. 11.

<sup>23</sup> Ibid., S. 12.

<sup>24</sup> Ibid., S. 13.

<sup>25</sup> この他にも、9 月 14 日の尋問記録の後に「補遺 De extraneis」として、さらに数名の容疑者に関する証言がラテン語で記されている。そのはじめに「魔女という異端について de heresi maleficarum」多くの疑いがある女に関して 3 名分の証言があり、一番目に、かつて容疑者のもとで奉仕していたという男の証言が載せられているが、それによると彼はユダヤ人の糞を持ってくるために、何度もインスブルックにあるユダヤ人の便所に遣いにやられたという。この証言が魔女容疑の一番目に置かれていることから、異端審問官らは魔女とユダヤ人との関連をかなり意識していたものと思われる。Vgl. Ibid., S. 23.

<sup>26</sup> Ibid., S. 13-14.

<sup>27</sup> 例えば、1520 年 2 月 11 日に帝国都市ニュルンベルクで逮捕されたエルス・ゲルノルティンとアンナ・ゾイリンという名の二人の女が、その後の尋問でほぼ同様の魔術について証言している。Vgl. Staatsarchiv Nürnberg, Repertorium 60a Ratsverlaß 646 fol. 10r-11r vom 11. Februar 1520 und 12v vom 26. Februar 1520.

<sup>28</sup> ニュルンベルクで活躍したアルブレヒト・デューラーは、1500 年頃に「魔女」という銅版画作品を発表しており、そこには年老いた裸の魔女が描かれている。またデューラーの弟子ハンス・バルドゥング・グリーンは初めニュルンベルクで、後にシュトラースブルクで活躍したが、彼も 1510 年に「魔女のサバト」という木版画を、1514/15 年には「魔女の群れ」を制作し、艶めかしい老魔女を描いた。彼らの作品はいずれも人気を博し、作品が広範に普及することで性的ふしだらな老魔女のイメージを広めるのに一役買ったと思われる。しかしここでの証言は、それ以前にアルプス地域においては民間で同様のイメージがすでに流布していたことを指し示している。

<sup>29</sup> Ammann, op. cit., S. 17.

<sup>30</sup> 中・近世ティロール伯領における農民の実態は、服部氏の前掲書に詳しい。

<sup>31</sup> Ibid., S. 19.

<sup>32</sup> Ibid., S. 19-20.

<sup>33</sup> Ibid., S. 20.

<sup>34</sup> I. アーレント＝シュルテによれば、低地ドイツやオランダ語圏では 16 世紀半ばまで魔女とえば、一般にこれら牛乳魔女のことを指すと言われていたという。Vgl. Ingrid Ahrendt-Schulte, *Weise Frauen-böse Weiber: Die Geschichte der Hexen in der Frühen Neuzeit*, Freiburg 1994, S. 30. 低地地方のみならず、南ドイツでも牛乳魔術は確認できる。例えば 1477 年 7 月 14 日、帝国都市ニュルンベルクでフリッツ・ヘルとその息子ハンスが牛乳魔術の廉で訴えられ、取り調べを受けている。同年 8 月 2 日にはフリッツの妻エルスも同容疑で逮捕されたが、いずれも釈放されている。Vgl. Staatsarchiv Nürnberg, Repertorium 4 Differentialakten, Nr. 33c, fol. 31v-32v.

<sup>35</sup> Ammann, op. cit., S. 22-23.

<sup>36</sup> Ibid., S. 27. これら 2 通の手紙は現存しない。

<sup>37</sup> Ibid., S. 28.

<sup>38</sup> 大公ジークムントへの書簡 ibid., S. 80-81. インスティトーリスへの書簡 ibid., S. 81-82.

<sup>39</sup> Ibid., S. 80.

<sup>40</sup> Ibid., S. 29.

<sup>41</sup> Ibid., S. 35-36. 証言に続く「通達 Instruction」において、ヘレナは異端審問官の面前で道につばを吐き捨てたり、説教を中断させたり、説教への欠席を他の住民たちにも勧めたりと、様々な悪事が付け加えられているが、編者のアマンも言っているように、「通達」においては証言内容にはないその記述が付け足されている。

<sup>42</sup> Ibid., S. 36-39.

<sup>43</sup> Ibid., S. 38. この容疑において用いられている論理は、前章で取りあげた 8 月 16 日および 9 月 3 日の証言でみられたものとはほぼ同じであると言える。

<sup>44</sup> Ibid., S. 65-66.

<sup>45</sup> Ibid., S. 66.

<sup>46</sup> Ibid., S. 66-67.

<sup>47</sup> Ibid., S. 67.

<sup>48</sup> 以下の根拠はすべて ibid., S. 68 に拠る。

<sup>49</sup> ここでメルヴァイスはこのように述べているが、アマンも指摘しているように、勅書には決して司教による承認の有無は書かれていない。

<sup>50</sup> ここで挙げられている第一および第五の根拠から、当時の異端審問では公証人までもが司教の影響下にあったものと思われる。註 13 も参照のこと。

<sup>51</sup> Ibid., S. 69.

<sup>52</sup> Ibid., S. 69-70.

<sup>53</sup> Ibid., S. 70.

<sup>54</sup> Ibid., S. 70-71.

<sup>55</sup> Ibid., S. 71.

<sup>56</sup> 宣誓の内容の全文は ibid., S. 72-74.

<sup>57</sup> 拙稿「悪魔学の受容—魔女研究における方法論的試み—」『思想』2018 年 1 月号、岩波書店、68—85 頁。

<sup>58</sup> 本稿の分析に際し、1486 年シュパイアー版（ラテン語初版）を底本とした。このファクシミリ版が 1991

年と 1992 年に、それぞれシュニダーとイエローシェクによって出版されている。André Schnyder, *Malleus Maleficarum von Heinrich Institoris (Alias Kramer) unter Mithilfe Jakob Sprengers Aufgrund der dämonologischen Tradition zusammengestellt: Wiedergabe des Erstdrucks von 1487 (Hain 9238)*, Göppingen 1991; Günter Jerouschek (Hrsg.), *Malleus maleficarum 1487 von Heinrich Kramer (Institoris)*, Hildesheim / Zürich / New York 1992. シュニダーおよびイエローシェクともに、初版の出版年を 1487 年としているが、正しくは 1486 年である。彼ら二人以外にも、多くの魔女研究者が初版の刊行年を誤って記しているが、初版は 1486 年の 12 月にはすでに書物として完成し、移送されていたことが製作者の会計簿から確認できる。詳しくは以下を参照。拙稿「15 世紀における『魔女への鉄槌』の受容—シュパイアーの印刷・出版業者ペーター・ドラッハの会計簿の分析を通じて—」『歴史家協会年報』第 7 号、2011 年、1—17 頁および拙稿「悪魔学の受容—魔女研究における方法論的試み—」『思想』2018 年 1 月号、岩波書店、68—85 頁。シュニダーによるファクシミリ版は、47 行 2 段組みの 1 頁を A から D のアルファベットを付して 4 分割している。『鉄槌』は全体が 3 つの「部 pars」からなり、それぞれの「部」は「問題 questio」に分かれ、個別の論題を扱っている。さらに第 2 部には「問題」が 2 題しか設定されていないが、その下位区分として「章 capitulum」があり、各問題の冒頭および第 3 部の冒頭には「導入問題 questio introductoria」が設けられている。引用に際しては作品の部・問題・章とともに頁数にシュニダーの付したアルファベットを記す。例えば第 2 部、第 2 問題、第 14 章、143 頁の 1 段目前半部分からの引用であれば、(2:2:14, 143A) と本文中に記載する。

<sup>59</sup> 『鉄槌』における契約論については以下を参照。拙稿「ヘンリクス・インスティトーリス『魔女への鉄槌』における「契約」概念」『ドイツ文学論攷』第 58 号、2017 年、25—48 頁。

<sup>60</sup> この問題に関しては以下を参照のこと。拙稿「「インスブルックの魔女裁判」再考—15 世紀後半における高地ドイツと教皇庁との関連から—」『史泉』第 113 号、2011 年、1—18 頁。